ずらむ。註大方又世に無き事なり。大臣の、御女三人、后にてさし竝べ奉り給ふ事、あさましく希有の事なり。唐土には昔三千人の后おはしけれど、それは筋も尋ねで、唯かたちありと聞ゆるを、隣の國まで擇び出して、その中に楊註貴妃ごときは、餘り時めき過ぎて悲しき事あり。王註昭君は胡の王に賜はりて、胡の國の人となり、上註陽人は楊貴妃にそばめられて、帝に見え奉らで、春の行き秋の過ぐる事をも知らずして、十六にて參りて、六十までありけり。かやうなれば三千人のかひなし。わが國には七の后こそおはすべけれど、代々に四人ぞ立て給ふ。この入道殿下の御一つ門よりこそ、太皇太后宮・皇太后宮・中宮三所出でおはしたれば、まことに希有の御幸なり。皇后宮一人のみ、筋別れ給へりといへども、それも貞信公の御末におはしませば、これをよそ人と思ひ申すべき事かは。然れば、たゞ世の中はこの殿の御光ならずと云ふ事なきに、この春こそはうせ給ひにしかば、いとゞたゞ三人の后のみ世におはしますめれ。

二六八

此の殿事にふれて遊ばせる詩・和歌など、居易〔や赤人〕・人丸・躬恒・貫之といふとも、え思ひ寄らざりけむとこそ覺え侍れ。註春日の行幸は、前の一條院の御時より始まれるぞかしな。それに又當帝幼くおはしませども、必ずあるべき事にて、註始まりたる例になりにたれば、大宮御輿に添ひ申させ給ひておはします。めでたしなどいふも世の常なり。すべらぎの御祖父にて、うち添ひ仕う奉らせ給へる殿の、御ありさま御かたちなど、少し世の常にもおはしまさましかば、飽かぬ事にや。そこら集りたる田舍世界の民百姓、これこそは確かに見奉りけめ。たゞ轉輪聖王などはかくやと、光るやうにおはしますに、佛見奉りたらむやうに、額に手を當てゝ拜み惑ふ樣ことわりなり。大宮の赤色の御扇さしかくして、御肩の程などは、少し見えさせ給ひけり。かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御透影もふたぎ、いかゞとこそは、もて隱し奉るに、事限りあれば、今日はよそほしき御有樣も、少しは人の見奉らむも、などかはともや思召しけむ。殿も宮もいふよしなく御心ゆかせ給へりける事、推し量られ侍るは。殿、大宮に、

二七〇

そのかみや祈りおきけむかすが野のおなじ道にもたづねゆくかな

御返し、

くもりなき世の光にやかすが野のおなじみちにもたづねゆくらむ

二七一

かやうに申しかはさせ給ふ程に、げに〳〵と聞えてめでたく侍りし中にも、大宮の遊ばしたりし、

みかさ山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきの跡をたづねて

これこそは翁らが心の及ばざるにや。あがりてもかばかりの秀歌え候はじ。その日にとりては、春日明神の詠ませ給へりけると覺え侍り。今日かゝる事どものはえあるべきにて、先の一條院の御

時にも、大入道殿の行幸申し行はせ給ひけるにやとこそ心得られ侍れな。大方幸おはしまさむ人の、和歌の道おくれ給へらむは、事のはえ無くや侍らまし。この殿は折節毎に、必ずかやうのことを仰せられて、事をはやさせ給ふなり。一年の北の政所の御賀に詠ませ給へりしは、

ありなれしちぎりはたえて今さらに心けがしに千代といふらむ

又この一品の宮の生れおはしましたりし御産養、大宮せさせ給へりし夜の御歌は聞かせ給へりや。それこそいと興あることを。たゞ人は思ひよるべき事にも侍らぬ和歌の體なり。

おとみやのうぶやしなひをあね宮のしたまふ見るぞうれしかりける

二七三

四條大納言の、かく何事もすぐれめでたくおはしますを、大入道殿、「いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ」と申させ給ひければ、中ノ關白殿・粟田殿などは、げにさもや思すらむと、はづかしげなる御氣色にて、物も宣はぬに、この入道殿は、いと若うおはします御身にて、「影をば踏まで面をやは踏まぬ」とこそ仰せられけれ。誠にこそさおはしますめれ。内大臣殿をだに近くえ見奉り給はぬよ。

さるべき人は、とうより御心だましひの猛く、御守りも強きなめりと覺え侍るは、花山院の御時に五月下つ闇に、五月雨も過ぎで、いとおどろおどろしくかきたれ雨の降る夜、帝さうぐしくや思召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐ろしかりける事どもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしき覺ゆ。まして物離れたる所などいかならむ。さあらむ所に、ひとりいなむや」と仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなむ」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興ある事なり。さらばいけ。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ」と仰せられければ、よその君達は、便なきことをも奏してけるかなと思ふ。又承り給へる殿ばらは、御氣色かはりて、益なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上にまれ、瀧口にまれ、一人昭慶門まで送れと仰せごとたべ。それより内には一人入り侍らむ」と申し給へば、「證なき事」と仰せらるゝに、げにとて、御手箱に置かせ給へる小刀申して立ちたまひぬ。今二所もにがむにがむ各々おはさうじぬ。子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」と、それをさへ分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中ノ關白殿陣までねんじておはしたるに、宴の松原の程に、そのものともなき聲どもの聞ゆるに、術な

二七四

二七五

くて歸り給ふ。粟田殿（道兼）は露臺の外までわなゝくわなゝくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌の程に、檐と等しき人のあるやうに見え給ひければ、物も覺えで、身の候はばこそ仰せごとも承らめとて、

二七六

各〻歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿（道長）はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思召す程にぞ、いとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかにいかに」（花山）と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたる物を取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」（花山）と仰せらるれば、「たゞにて歸り參りて侍らむは、證候ふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削りて候ふなり」と、つれなく申し給ふに、いとあさましう思召さる。こと殿達の御氣色は、いかにもなほ直らで、この殿のかくて參り給へるを、帝より始め、感じのゝしられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思召されければ、つとめて藏人して「削り屑をつがはして見よ」と仰せ言ありければ、もていきて押つけて見たうびけるにつゆ違はざりけり。その削り跡はいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申しゝかし。

二七七

故女院（藤子）の御修法して、飯室の權僧正のおはしましし伴僧にて、相人の候ひしを、女房どもの呼びて相ぜられけるついでに、「內大臣殿（道隆）はいかゞおはする」と問ふに、「いとかしこうおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿（道長）こそいみじくおはしませ」といふ。又粟田殿（道兼）を問ひ奉れば、「それも

いとかしこうおはします。大臣の相おはします」又「あはれ中宮大夫殿こそいみじうおはしませ」といふ。又權大納言殿（伊周）を問ひ奉れば、「それもいとやむごとなくおはします。雷の相おはします」と申しければ、「雷はいかなるぞ」と問ふに、「一際はいと高く鳴れど、後とげのなきなり。されば御末いかゞおはしまさむと見えたり。中宮ノ大夫殿こそ、限り無く際なくはおはしませ」と、こと人を

二七八

問ひ奉る度には、この入道殿を必ず引添へ奉りてほめ申す。「いかにおはすれば、かく度毎には聞え給ふぞ」といへば、「第一の相には、虎子如渡深山峯なりと申したるに、些かも違はせ給はねば、かく申し侍るなり。この譬は、虎の子の險しき山の峯を渡るが如しと申すなり。御かたち容體は、たゞ毘沙門の勢見奉らむがやうにおはします。御相かくの如し」といへば、「誰よりも勝れ給へり」とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あて違はせ給へる事やはおはします。帥の大臣（伊周）の大臣までかくすがやかになり給へりしを、初めよしとはいひけるなめり。いかづちは落ちぬれど又

二七九

も上るものを、星のおちて石となるにぞ譬ふべきや。それこそ歸り上る事なけれ。

をり〳〵につけたる御かたちなどは、げに永き思ひいでとこそは人申すめれ。中にも三條院の御時、賀茂の行幸の日、雪の殊の外にいたう降りしかば、御單の袖を引出でゝ、御扇を高く持たせ給へるに、いと白く降りかゝりたれば、あないみじとて、打拂はせ給へりし御もてなしは、いとめで

たくおはしましゝものかな。上の御衣は黒きに、御單衣は紅の華やかなるあはひに、雪の色ももて
はやされて、えもいはずおはしましゝものかな。高名のなにがしといひし御馬、いみじかりし惡馬な
り。あはれそれを奉り鎭め給へりしはや。三條院も、その日の事をこそ思召し出でおはしますなれ。

二八〇

御病のうちにも、「賀茂の行幸の日の雪こそ忘れ難けれ」と仰せられけむこそ、あはれに侍れ。かく
世間の光におはします殿の、一年ばかり、物を安からず思召したりしよ。いかに天道御覽じけむ。
さりながらも、些かひけし御心やわたらせ給へりし。おほやけざまの公事作法ばかりには、あるべ
き程にふるまひ、時違ふる事なくつとめさせ給ひて、うち〳〵には、所も置き聞えさせ給はざりし
ぞかし。

帥殿の南の院にて、人々集めて弓遊ばしゝに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけず怪しと、中ノ關
白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて、下臈におはしませど、先に立て奉りて、まづ射さ
せ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢數、今二つ劣り給ひぬ。中ノ關白殿、又御前にさぶらふ人々も、「今二度
のべさせ給へ」と申して、のべさせ給へりけるに、安からず思しなりて、「さらばのべさせ給へ」と
仰せられて、又射させ給ふとて、仰せらるゝやう、「道長が家より帝后立ち給ふべきものならば、
この矢あたれ」と仰せらるゝに、同じものゝ中心には當るものか。次に帥殿射給ふに、いみじう臆し給

二八一

ひて、御手もわなゝくけにや、的のあたり近くだに寄らず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青く
なりぬ。又入道殿射給ふとて、「攝政關白すべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに、始
めの同じやうに、的の割るゝばかり射させ給ひつ。饗應しもてはやし聞えさせ給へる興もさめて、
事にがくなりぬ。父大臣、帥殿に、「なにか射る。な射そ、な射そ」と制せさせ給ひて、事さめにけ
り。入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。その折は左京ノ大夫とぞ申しゝ。弓をいみじく射さ
せ給ひしなり。又いみじく好ませ給ひしなり。けうに見ゆべき事ならねども、人の御さまの、いひ
出で給ふことのおもむきより、かたへは臆せられ給ふなめり。

又、故女院の御石山詣に、この殿は御馬にて、帥殿は車にて參り給ふに、障る事ありて、粟田口
より帥殿歸り給ふとて、院の御車のもとに參り給ひて、案内申させ給ふに、御車も止めたれば、轅
を抑へて立ち給へるに、入道殿は、御馬を押返して、帥殿の御うなじのもとに、いと近う打寄せ
給ひて、「とくつかうまつれ、日のくれぬるに」と仰せられければ、あやしく思されて見返り給へれ
ど、驚きたる御氣色もなく、とみにものかせ給はで、「日くれぬ。とく〳〵」とそゝのかせ給ふを、
いみじう安からず思せど、いかゞはせさせ給はむ。やをら立のかせ給ひにけり。父おとゞにぞ申さ
せ給ひければ、「大臣かろむる人のよきやうなし」とぞ宣はせける。

註やよひ上の巳の日の御祓に、やがて逍遙し給ふとて、帥殿、河原に、さるべき人々あまた具して出でさせ給へり。平張ども數多打渡したるおはし所に、入道殿も出でさせ給へるに、御車を近くやれば、「便なき事、かくなせそ。やりのけよ」と仰せられけるを、某丸といひし御車副の、「いで何事宣ふ殿にかあらむ。かくけこし給へれば、この殿は不運におはするぞかし。わざはひやわざはひや」とて、いたく御車牛をうちて、今少し平張のもと近くこそ、仕うまつり寄せたりけれ。「辛う」も、この男にいはれぬるかな」とぞ仰せられける。さてその御車副をば、いみじくらうたくせさせ給ひ、御顧みありしかば、かやうの事にて、この殿達の御仲いとあしかりき。

二八三

女院は、入道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿は疎々しくもてなさせ給へりけり。帝、皇后宮をねんごろに時めかさせ給ふゆかりに、帥殿は明け暮れ御前に候はせ給ひて、入道殿をば更にも申さず、女院をもよからず事にふれて申させ給ふを、おのづから心やえせさせ給ひけむ、いとも本意なき事に思召しける、ことわりなりな。入道殿の世を知らせ給はむ事を、帝いみじう澁らせ給ひけり。皇后宮、父大臣おはしまさで、世の中を引變らせ給はむ事を、いと心苦しう思召して、粟田殿にもとみにやは宣旨下させ給ひし。されども女院の、道理のまゝの御事を思召し、又帥殿をばよからず思ひ聞えさせ給ひければ、入道殿の御事を、いみじう澁らせ給

二八四

ひけれど、「いかでかくは思召し仰せらるゝぞ。大臣越えられたる事だに、いといとほしく侍りしに父大臣の強ちにし侍りし事なれば、いなびさせ給はずなりにしにこそ侍れ。粟田の大臣にはせさせ給ひて、これにしも侍らざらむは、いとほしさよりも、御爲なむいと便なく、世の人もいひなし侍らむ」など、いみじう奏せさせ給ひければ、むづかしうや思召されけむ、後には渡らせ給はざりけり。されば上の御局に上らせ給ひて、こなたへとは申させ給はで、われ夜の御殿に入らせ給ひて、なく〳〵申させ給ふ。その日は、入道殿は上の御局に候はせ給ふ。いと久しう出でさせ給はねば、御胸つぶれさせ給ひける程に、とばかりありて、戸をおしあけてさし出でさせ給へりける、御顏は赤み濡れ艶めかせ給ひながら、御口は快くゑませ給ひて、「あはや宣旨下りぬ」とこそ申させ給ひけれ。些かの事だに、皆この世ならず侍るなれば、いはむやかばかりの御有樣は、人のともかくもおぼしおかんによらせ給ふべきにもあらねど、いかでかは院をおろかに思ひ申させ給はまし。その中にも道理すぎてこそは報じ奉り仕うまつらせ給ひしは。御骨をさへこそはかけさせ給へりしか。

二八五

中ノ關白殿、粟田殿うちつゞきうせさせ給ひて、入道殿に世の移りし程は、さも胸つぶれて、きよきよと覺え侍りしわざかな。いとあがりての世は知り侍らず、翁物覺えて後は、かゝる事候はぬものをや。今の世となりては、一の人の、貞信公、小野宮殿をはなち奉りては、十年とおはする事の、

近くは侍らねば、この入道殿もいかゞと思ひ申し侍りしに、いとゞかゝる運におされて、御兄人遠はとりもあへず亡び給ひしにこそおはしますめれ。それも又さるべくあるやうある事を、皆世はかかるなゞめりとぞ、人々思召すとて、有様を少し又申すべきなり。

二八六　世の中のみかど、神の代七代をばさるものにて、神武天皇より始め奉りて、三十七代に當り給ふ孝徳天皇の御代よりこそは、さま〴〵の大臣定り給ふなれ。たゞしこの御時、大中臣の鎌子の連と申して、内大臣になり始め給ふ。その大臣は常陸の國にて生れ給へりければ、三十九代に當り給へる帝天智天皇と申す、その帝の御時にこそ、この鎌足の大臣の御姓藤原と改まり給ひたれ。されば世の中の藤氏の始めは、内大臣鎌足の大臣をし奉れり。その末々より多くの帝・后・大臣・公卿さま〴〵になり出で給へり。たゞし、この鎌足の大臣を、この天智天皇いとかしこく時めかし思して、わが女御一人を、この大臣に譲らしめ給ひつ。その女御たゞにもあらず孕み給へりければ、帝の思さしめ給ひけるやう、この女御の孕める子、男ならば大臣が子とせむ、女ならば朕が子とせむとおもほして、かの大臣に仰せられけるやう、「男ならば大臣の子にせよ、女ならばわが子にせむ」と契らしめ給へりけるに、この御子男にて生れ給へりければ、内大臣の御子とし給ふ。この大臣は、もとより男一人

二八七　女一人をぞもち奉らせ給へりける。この御腹にさしつゞき女二人男二人うまれ給ひぬ。その姫君は、

天智天皇の皇子大友の皇子と申しゝが、太政大臣の位にて、次にはやがて同じ年の中に帝となり給ひて、天武天皇と申しける帝の女御にて、二所ながらさし續きおはしけり。大臣のもとの太郎君をば中臣の意美麻呂とて、宰相までなり給へり。天智天皇の女御の孕まれ給へりしは、右大臣までなり給ひて、藤原ノ不比等の大臣とておはしけり。うせ給ひて後、贈太政大臣になり給へり。鎌足の大臣の三郎は、宇合とぞ申しける。四郎は麿と申しき。この男君たち、皆宰相ばかりまでぞなり給へる。かくて鎌足の大臣は、天智天皇の御時、藤原の姓賜はり給ひし年ぞ、うせさせ給ひける。内大臣の位にて二十五年ぞおはしましける。太政大臣になり給はねど、藤原氏の出ではじめのやむごとなきによりて、うせ給へる後の御いみな淡海公と申しけり。

二八八　この繁樹がいふやう、「大織冠をば、いかで淡海公とは申さむ。大織冠は大臣の位にて二十五年、御年五十六にてなむかくれおはしましける。ぬしの宣ふ事ども、天の川をかき流すやうに侍れど、をり〳〵かゝる僻事ぞ交りたる。されども誰か又かうは語らむな。佛在世の浮名居士と覺え侍るものかな」といへば、世繼が曰く、「昔唐國に孔子と申す物識宣ひけるやう侍り。『智者も千の慮りには必ず一つあやまちあり』となむあれば、世繼、年百歳に多く餘り、二百歳に足らぬ程にて、かくまで問はずがたりを申すは、昔の人にも劣らざりけるにやあらむとなむ覺ゆる」といへば、繁樹、

「しか〳〵。まことに申すべき方なくこそ侍れ」とて、かつは涙を押拭ひなど、感ずるさまことなり。まことにいひても餘りにぞ覺ゆるや。

御子の右大臣不比等のおとゞ、實は天智天皇の御子なり。されど鎌足の大臣の二郎になり給へり。この不比等の大臣、御名の文字より始めて、なべてならずおはしましけり。「ならび等しからず」とつけられ給へる名にてぞ、この文字は侍りける。この不比等の大臣の御男君だち二人ぞおはしける。太郎は武智麿と聞えて、左大臣までなり給へり。二郎は房前と申して、宰相までなり給へり。この不比等の大臣の御女二人おはしけり。一所は聖武天皇の御母后、光明皇后とぞ申しける。今一所の御女は聖武天皇の女御にて、女親王をぞ生み奉り給へりける。女親王を、聖武天皇、女帝に据ゑ奉り給ひてけり。この女帝をば高野の女帝と申しけり。二度位に即かせ給ひたりける。

二八九

さて不比等の大臣の男子二人、又御弟二人とを四家と名づけて、皆門分ち給へりけり。その太郎武智麿をば南家と名づけ、二郎房前をば北家と名づけ、御はらからの宇合の式部卿をば式家と名づけ、その弟の麿をば京家と名づけ給ひて、これを藤氏の四家とは名づけられたるなりけり。この四つの家より、數多、樣々の國王・大臣・公卿多く出で給ひて榮えおはします。しかあれど北家の末、今に枝ひろごり給へり。その御つゞきをまた一筋に申すべきなり。絶えにたる方をば申さじ。人な

らぬ程の者どもは、おのづからその御末にもや侍らむ。この鎌足の大臣よりの御つぎ〳〵、今の關白殿まで、十三代にやならせ給ひぬらむ。その次第を聞しめせ。藤氏と申せば、たゞ藤原をばさいふなりとぞ、人は思さるらむ。さはあれど、もとすゑ知る事はいとあり難き事なり。

二九〇

一　内大臣鎌足の大臣、藤原の姓賜はり給ひての年の十月十六日うせさせ給ひぬ、御年五十六。大臣の位にて二十五年。この姓の出で來るを聞きて、紀の氏の人のいひける、「藤懸りぬる木は枯れぬるものなり。今ぞ紀氏はうせなむずる」とぞ宣ひける。まことにこそしか侍るめれ。この鎌足の大臣の病づき給へるに、昔この國に佛法ひろまらず、僧などは、たやすく侍らずやありけむ、聖德太子の傳へ給ふと雖も、この頃だに、生れたるちごも法華經を讀むと申せども、まだ讀まぬも侍るぞかし。百濟國より渡りたりける尼して、維摩經供養し給へりけるに、御こゝち一度におこたりて侍りければ、その經をいみじき物にし給ひけるまゝに、維摩會は侍るなり。

一　鎌足の大臣の御次郎左大臣正一位不比等大臣、御年六十二、養老四年八月三日うせ給ふ。大臣の位にて十三年、贈太政大臣にならせ給へり。元明天皇・元正天皇の御時二代、大臣にておはしましき。

一　不比等大臣の御次郎房前の大臣、宰相にて二十年。大炊天皇の御時天平寶字四年庚子八月七

日贈太政大臣になり給ふ。元正天皇・聖武天皇二代、この間宰相にて、天平九年四月十七日にうせ給ひにき。

一　房前の大臣の四男眞楯の大納言、稱德天皇の御時、天平神護二年三月十六日にうせ給ふ、御年五十二。贈太政大臣、公卿にて七年。

二九一

一　眞楯の大納言の御次郎、右大臣從二位左近衛大將內麻呂の大臣、御年五十七。公卿にて二十年大臣の位にて七年。贈從一位左大臣、桓武天皇・平城天皇二代にあひ給へり。

一　內麻呂の大臣の御三郎、冬嗣の大臣は、左大臣までなり給へり。後には贈太政大臣。この殿より次々、さま〳〵あかしたれば、細かに申さじ。

鎌足の御代よりさかえひろごり給へる御末々、やう〳〵うせ給ひて、この冬嗣の程は、むげに心細くなり給へり。その時は源氏のみぞ、さま〳〵大臣・公卿にておはせし。(一)それに、この大臣なむ南圓堂を建てゝ、丈六の不空羂索觀音を据ゑ奉り給ふ。さてやがてふくくゑんざく經一千卷供養し給へり。今にその經ありつゝ、藤氏の人々取りて守りにしあひ給へり。その佛經の力にこそ侍るめれ、又榮えて、帝の御後見、今に絶えず末々せさせ給ふめるは。その供養の日ぞかし、こと姓の上達部あまた、日の中にうせ給ひにければ。まことにや人々申すめり。

二九二

一　冬嗣大臣の御太郎長良の中納言は、贈太政大臣までなり給へり。

一　長良大臣の御三郎基經ノ大臣は、太政大臣までなり給へり。

一　基經大臣の御四郎忠平ノ大臣は、太政大臣までなり給へり。

一　忠平大臣の御次郎師輔ノ大臣は、右大臣までなり給へり。

一　師輔右大臣の御三郎兼家ノ大臣は、太政大臣まで。

一　兼家大臣の御五郎道長ノ大臣は、太政大臣まで。

一　道長大臣の御太郎、只今の關白左大臣頼通のおとゞこれにおはします。この殿の御子の今までおはしまささりつるこそ、(一)いと不便に侍りつるを、この若君の生れさせ給へる、いとかしこき事なり。母は申さぬ事なれど、これはいとやむごとなくさへおはするこそ。故左兵衛督は、人がらこそ(二)いとしも思はれ給はざりしかども、殿あて人におはするに、又かく世をひゞかす御孫の出でおはしたる、なきあとにも、いとよし。七夜の事は入道殿せさせ給へるに、遣はしける歌、

年をへてまちつる松のわかえだにうれしくあへる春のみどり子

帝・東宮をはなち奉りては、これこそ孫の長とて、やがて御童名を長君とつけ奉らせ給ふ。この四家の君だち、昔も今も數多おはします中に、みちたえず勝れ給へるはかくなり。

二九三

その鎌足のおとゞ生れ給へるは、常陸の國なれば、かしこの鹿島といふ所に、氏の御神をすまし
め奉り給ひて、その御時より今に至るまで新しき帝・后・大臣立ち給ふ折は、(二)みてぐらの使必ず立つ。

二九四

帝、奈良におはしまし〻時に、鹿島とほしとて、大和國三笠山にふり奉りて、註春日明神と名づけ奉り
て、今に藤氏の御氏神にて、(三)おほやけ、男女註(四)使に立てさせ給ひ、后ノ宮・氏の大臣・公卿皆この明神に
仕う奉り給ひて、二月、十一月上の申の日御祭にてなむ、さま〴〵の使(五)立ちの〻しる。帝この京に
遷らしめ給ひては、又近くふり奉りて、(六)大註原野と申す。二月の初卯の日、霜月の初子の日と定めて、
年に二度の御祭あり。又同じく公家の使たつ。藤氏の殿ばら、皆この御神にみてぐら(七)十列奉り給ふ。
なほも近くとて、又ふり奉りて、吉田と申しておはしますめり。この吉田の明神は、註山蔭の中納言
のふり奉り給へるぞかし。御祭の日、四月下の子の日と、十一月下の申の日とを定めて、我が御族
に帝・后ノ宮たち給ふものならば、(八)おほやけ祭になさむと誓ひ奉り給へれば、一條院の御時よりおほ
やけ祭にはなりたるなり。

又鎌足のおとゞの御氏寺、大和國多武峯に造らしめ給ひて、そこに御骨を納め給ひて、今に(九)三昧

二九五

行ひ奉り給ふ。不比等大臣は註山階寺を建立せしめ給へり。それにより、かの寺に藤氏を祈り申すに、
このみ寺竝びに註多武峯・春日・大原野・吉田に、例に違ひ怪しき事出で來ぬれば、御寺の僧・禰宜

等などおほやけに奏し申して、その時に註藤氏の長者殿占はしめ給ふに、御つゝしみあるべきは、年
の當り給ふ殿ばらたちのもとに、(一)御物忌を書きて、(二)一の所より配らしめ給ふ。(三)おほよそかの寺より
始まりて、年に二三度會を行はる。正月八日より十四日まで、八省にて、奈良方の僧を講師として
御齋會行はしめ、おほやけより始め、藤氏の(四)註殿原皆加供し給ふ。又三月七日より始めて十三日ま

二九六

で、註藥師寺にて最勝會七日、又山階寺にて十月十日より維摩會七日。皆これらの度に、勅使下向し(五)
て衾遣はす。藤氏の殿原より五位まで奉り給ふ。(六)南京の法師、三會講師しつれば、註已講と名づけて、
その次第をつくりて、律師・註僧綱になる。かゝればかの御寺いかめしうやむごとなき所なり。いみ
じき非道の事も、山階寺にかゝりぬれば、又ともかくも人物いはず。山階道理とつけて置きつ。か
〻れば藤氏の御有樣たぐひなくめでたし。

同じ事のやうなれど、又つゞきを申すべきなり。后の宮の御父、帝の祖父となり給へるたぐひを
こそはあかし申さめとて。

一　内大臣鎌足の大臣の御女二所、やがて皆天武天皇に奉り給へりけり。男女みこ達おはしまし
けれど、帝東宮立たせ給はざゝめり。

一　贈太政大臣不比等の大臣の御女二所、一人の御女は、文武天皇の御時の女御、御子うまれ給

へり。それを聖武天皇と申す。御母をば光明皇后と申しき。今一人の御女は、やがて御甥の聖武天皇に奉りて、女御子うみ奉り給へるを、女帝に立て奉り給へるなり。高野の女帝と申すこれなり。孝謙 淳仁 稱德

四十六代に當り給ふ。それおり給へるに、又帝一人を隔て奉りて、又四十八代にかへりゐ給へるなり。御母后を贈皇后と申す。然れば不比等の大臣の御女二人ながら后におはしましますめれど、高野の女帝の御母后は、贈皇后と申したるにて、おはしまさぬ世に后ノ宮にゐ給へると見えたり。かるが故に不比等大臣は、光明皇后又贈后の父、聖武天皇并びに高野の女帝の御祖父。

一　贈太政大臣冬嗣の大臣は、太皇太后順子の御父、文德天皇の御祖父。

一　太政大臣良房の大臣は、皇太后宮明子の御父、清和天皇の御祖父。

一　贈太政大臣長良の大臣は、皇太后高子の御父、陽成天皇の御祖父。

一　贈太政大臣總繼の大臣は、贈皇太后宮澤子の御父、光孝天皇の御祖父。

一　內大臣高藤の大臣は、皇太后宮胤子の御父、醍醐天皇の御祖父。

一　太政大臣基經の大臣は、皇后宮穩子の御父、朱雀、村上二代の御祖父。

一　右大臣師輔の大臣は、皇后宮安子の御父、冷泉院并びに圓融院の御祖父。

一　太政大臣伊尹の大臣は、贈皇后宮懐子の御父、花山院の御祖父。

一　太政大臣兼家の大臣は、皇太后宮詮子ならびに贈后超子の御父、一條院ならびに三條院の御祖父。

二九七

一　太政大臣道長の大臣は、太皇太后宮彰子・皇太后宮妍子・中宮威子・春宮の御息所嬉子の御父、當帝（後一條）并に東宮（後朱雀）の御祖父におはします。こゝらの御中に后三人竝べ据ゑて見奉らせ給ふ事は、入道殿下（註）より外に聞えさせ給はざゝめり。（註）閑白左大臣・內大臣（教通）・大納言（頼宗 能信）二人・中納言（長家）の御親にておはします。（註）さりや、聞しめし集めよ、日本國には唯一無二におはします。

二九八

まづは造らしめ給へる御堂などの有樣、鎌足ノ大臣の多武峯、不比等ノ大臣の山階寺、基經ノ大臣の極樂寺（註）、忠平ノ大臣の法性寺（註）、九條殿（師輔）の楞嚴院（註）、あめの帝の造り給へる東大寺（註）も、佛ばかりこそは大きにおはしますめれど、なほこの無量壽院（註）には竝びたまはず。ましてこと御寺々はいふべきならず。大安寺（註）は、兜率天（註）の一院を天竺の祇園精舍（註）にうつし造り、天竺の祇園精舍を唐土の西明寺（註）にうつしつくり、唐土の西明寺の一院を、この國の帝（推古）は大安寺にうつさしめ給へるなり。しかあれども、只今はなほこの無量壽院まさり給へり。南京（註）のそこばくの多かる寺ども、なほ當り給ふなし。恒德公（兼光）の法住寺（註）いと猛（註）なれど、なほこの無量壽院すぐれ給へり。難波（註）の天王寺（註）など、聖德太子の御心に入れて造り給へれど、猶この無量壽院まされり。奈良は七大寺・十五大寺（註）など見較（註）ぶるに、なほこの

無量壽院いとめでたく、極樂淨土のこの世に現はれけるよと見えたり。かるが故に、この無量壽院も、思ふに思召し願ずる事侍りけむ。淨妙寺は東三條のおとゞの大臣になりたまひて、御よろこびに木幡に參らせ給へりしに、御供に入道殿具し奉らせ給ひて、御覽ずるに、多くの先祖の御骨おはするに、鐘の聲聞き給はぬ、いと憂き事なり、我が身思ふさまになりたらば、三昧堂建てむと、御心の中に思召し企てたりけるとこそ承れ。

昔もかゝりける事多く侍りける中に、極樂寺・法性寺ぞいみじく侍るや。御年などもおとなびさせ給へるだにも、思召しよるらむ程、なべてならず覺え侍るに、いづれの御時とはたしかに聞き侍らず。たゞ深草の御程にやなどぞ思ひやられ侍る。芹川のみゆきせしめ給ひけるに、昭宣公童殿上にて仕う奉らせ給へりけるに、帝琴を遊ばしける。この琴ひく人は、別の爪を作りて、およびにさし入れてぞ彈く事にて侍りし。さてもたせ給ひたりけるを、落しおはしまして、大事におぼしめしけれど、又造らせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにてぞ思召し寄りけむ、おとなしき人々にも仰せられずて、幼くおはします君にしも、「求めて參れ」と仰せられければ、御馬を打返しておはしましけれど、いづくをはかりとも、いかでかは尋ねさせ給はむ。見つけて參らせざらむ事のいといみじう思召しければ、これ求め出でたらむ所には、一伽藍を建てむと、願じ思して求め給ひけるに、

三〇〇

三〇一

出で來たる所ぞかし、極樂寺は。幼き御心に、いかでか思召し寄らせ給ひけむ。さるべきにて御爪も落ち、幼くおはします人にしも、仰せられけるにこそは侍りけめ。

さて、やむごとなくならせ給ひて、御堂建てさせにおはします御車に、貞信公はいと小さくて具し奉り給へりけるに、法性寺の前渡り給ふとて、てゝごに、「こゝこそよき堂所なめれ。こゝに建てさせ給へかし」と聞えさせ給ひけるに、いかに見てかくいふらむと思して、さし出でゝ御覽ずれば、まことにいとよく見えければ、幼き目にいかでかく見つらむ、さるべきにこそあらめと思召して、「げにいとよき所なめり。ましが堂を建てよ。われはしかぐの事のありしかば、そこに建てむずるぞ」と申させ給ひける、さて法性寺は建てさせ給ひしなり。「又九條殿の飯室の事などは如何にぞ。横川の大僧正の御房にのぼらせ給ひし御供には、繁樹も參りて侍りき」「かやうの事ども聞き見給ふれど、なほこの入道殿、世にすぐれぬけ出でさせ給へり」

「天地にうけられさせ給へるはこの殿こそおはしませ。何事も行はせ給ふ折に、いみじき大風吹き長雨降れども、まづ二三日かねて空晴れ、土乾くめり。かゝれば或は聖德太子の生れ給へると申し、或は弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給ふとも申すめり。げにそれは翁らがさがな目にも、たゞ人とは見えさせ給はざめり。なほ權者にこそおはしますめれとなむ仰ぎ見奉る。かゝればこの御世の

三〇三

樂しき事限り無し。その故は、昔は殿ばら宮ばらの馬飼牛飼、何の御靈會、祭の料とて、錢・紙・米など乞ひのゝしりて、野山の草木をだにやはからせし。仕丁おものもちいで來て、人の物とり奪ふことと絶えにけり。又里の刀禰、村の行事出で來て、火祭や何やと、煩はしくせめし事、今は聞えず。かばかり安穩泰平なる時には逢ひなむやと思ふは。翁らが卑しき宿りも、帶紐をときて、門をだにさゝで、安らかにのび臥したれば、年も若え、命ものびたるぞかし。まづは北野・賀茂河原に作りたる豆・さゝげ・瓜・茄子といふ物、この中頃は、更に術なかりしものをや。この年頃はいとこそ樂しけれ。人のとらぬをばさるものにて、馬牛だにぞはまぬ。さればたゞ任せ捨てつゝおきたるぞかし。かく樂しき彌勒の世にこそ逢ひて侍れや」といふめれば、今一人の翁「只、今はこの御堂の夫を頻りに召す事こそ、人は堪へ難げに申すめれ。それはさは聞き給はぬか」といふめれば、世繼、「しか〳〵、その事ぞある。二三日まぜにめすぞかし。されどそれ參るにあしからず。故は、極樂淨土の新たに現はれ出で給ふべき爲にめすなりと思ひ侍れば、いかで力堪へば參りて仕う奉らむ、行く末にこの御堂の草木となりにしがなとこそ思ひ侍れ。さればこの物の心知りたらむ人は、望みても參るべきなり。されば翁ら、またあらじ、一度かゝず奉り侍るなり。さて參りたればあしき事やはある。飯酒しげくたび、もて參るくだものをさへ惠みたび、常に仕う奉る者は、衣裳をさへこそはあて行はしめ給へ。されば參る下人もいみじういそがしがりてぞ進み集ふめる」といへば、「しか、それさる事に侍り。たゞし翁らが思ひえて侍るやうは、いと賴もしきなり。翁いまだ世に侍るに、衣裳やれ、むづかしきめ見侍らず。又飯・酒に乏しきめ見侍らず。もしこの事どもの術なからむ時は、紙三枚をぞ求むべき。故は、入道殿下の御前に申文を奉るべきなり。その文に作るべきやうは、『翁、故太政大臣貞信公殿下の御時の小舍人童なり。それ多くの年積りて術なくなりにて侍り。關下の君、末の家の子におはしませば、同じき君と賴み仰ぎ奉る。物少し惠み給はらむ』と申さむには、少々の物は賜ばじやはと思へば、それは案の物にて、倉に置きたるが如くなむ思ひ侍る」といへば、世繼、「それはげにさる事なり。家貧しくならむ折は、御寺に申文奉らしめむとなむ、卑しきわらはべと打語らひ侍る」と同じ心にいひかはす。

三〇五

世繼「さても〳〵うれしく對面したるかな。年頃の袋の口あけ、綻を斷ち侍りぬる事。さてもこののしる無量壽院には、幾度參り拜み奉り給ひつ〔る歟カ〕」といへば、「おのれは大御堂の供養の年の會の日は、人いみじう拂ふべかゝなりと聞きしかば、試樂といふ事、三日かねてせしめ給ひしになむ、參りて侍りし」といへば、世繼、「おのれは度々參り侍りぬ。供養の日の有樣のめでたさは更にもあらずや。又の日、今日は御佛など近くて拜み奉らむ、物ども取りおかれぬ先にと思ひ

て、参りて侍りしに、宮達の諸堂拜み奉らせ給ひし、見申し侍りしこそ、かゝる事に逢はむとて
今まで生きたるなりけりと覺え侍りしか。物覺えて後さる事をこそまだ見侍らね。御輦車に四所
奉りしぞかし。口に大宮（彰子）・皇太后宮（妍子）・御袖ばをりをいさゝかさし出でさせ給ひて侍りしに、枇杷（註妍子）
殿の宮の御髪の、土にいと長くひかれさせ給ひて、出でさせ給へりしは、いと珍かなりし事かな。し
りの方には中宮（威子）・かんの殿（嬉子）奉りて、たゞ御身ばかり御車におはしますやうにて、御衣ども（三）皆ながら
出でゝ、それも土までこそひかれ侍りしか。一品（禎子）の宮も中に奉りたりけるにや、御衣どもはなにが
しのぬしの（四）持ちたうび、御車のしりにぞ候はれし。單（註）の御衣ばかりを奉りておはしましけるなゝめり。

三〇六

御車は、（五）註まうち君だち引かれて、しりには關白（道通）殿を始め奉り、殿原、さらぬ上達部・殿上人、御直衣
にて歩み續かせ給へりし、（六）いであないみじや。中宮（能信）ノ權ノ大夫殿のみぞ堅（一）固の御物忌にて參らせ給は
ざりし、（二）さていみじく口惜しがらせ給ひける。中宮（威子）の御裝束は權（能信）ノ大夫殿せさせ給へりし、いと清ら
にてこそ見え侍りしか。「供養の日啓すべき事ありて、おはします所に參りて、五所居竝ばせ給へり
しを見奉りしかば、中宮の御衣の優（ゼ）に見えしは、我がしたればにや」とこそ大夫（能信）殿仰せられけれ。か
（三）くロばかりさかしだち侍れど、下萬の（四）つたなき事は、いづれの御衣も程へぬれば、色どものつぶと（六）
わすれ侍りにけるよ。殊にめでたくせさせ給へりければにや、下は紅薄物の御單（註ひとへがさね）重にや、御表着（註うはぎ）よ

三〇七

くも覺え侍らず、萩（註）の織物の三重がさねの御唐衣に、秋の野を縫ひ物にし、繪にも書かれたるにや
とぞ、目もおどろきて見（七）給へし。こと宮々のも、殿原の調じて奉らせ給へりけるとぞ人申しゝ。大宮（註彰子）
は二重織物折り重ねられて侍りし。皇太后宮（妍子）は總じて唐裝束。かんの殿（嬉子）のは、殿（道通）こそはせさせ給へり
しか。こと御（註）方々のも繪かきなどせられたりと聞かせ給ひて、俄に箔押しなどせられたりければ、
入道殿（道長）御覽じて、「よき呪師（註じゅし）の裝束（きうぞく）かな」とて笑ひ申させ給ひけり。

三〇八

殿（道長）はまづ御堂御堂あけつゝ待ち申させ給ふ。南大門（註）の程にて見申すだに（一）ゑましく覺え侍りしに、
御堂の渡殿のはざまより、一品（禎子）宮の辨の乳母（めのと）、今一人は、それも一品宮の大輔の乳母、中將の乳母
とかや、三人とぞ承りし、御車より下りさせ給ひて、ゐざり續かせ給ひつるを見奉り給へるぞかし。
恐ろしさにわなゝかれしかど、今日（二）さばかりの事はありなむやと思ひて見參らするに、（四）などてかは
とは申しながら、（一）いづれと聞えさすべくもなく、とり〳〵にめでたく（二）おはしまさふ。大宮（彰子）の御ぐし
御衣（ぞ）の裾に餘らせ給へり。中宮（威子）は御たけに少し餘らせ給へり。御扇をいと近くさし隱しておはし
ます。皇太后宮（妍子）は御衣の裾に一尺ばかり餘らせ給へる御裾、扇のやうにぞ。かんの殿（嬉子）、御たけに七
八寸餘らせ給へり。皇太后宮は、御扇少しのけてさし隱させ給ひける。一品（禎子）宮は、殿（道長）の御前（おまへ）、「何か（三）なに
ゐさせ給ふ。立たせ給へ」とて、長押（なげし）降り昇（のぼ）らせ給ふ御手を捉（とら）へつゝ、扶（たす）け申させ給ふ。餘りなる

事は目もとゞろく心ちなむし給ひける。あらはならず引きふたぎなど、つくろはせ給ひける程に、
御覽じつけられたるものかは。「あないみじ。宮仕へに宿世の盡くる日なりけり」と、生ける心ち
もせで、三人ながら候ひ給ひける程に、「宮たち見奉りつるか。いかゞおはしましつる。この老法
師の女たちには、けしうはあらずおはしまさふな。なあなづられそよ」と打ゑみて仰せられかけて、
いたうもふたがせ給はでおはしましたりしなむ、生きいでたる心ちして、嬉しなどはいふべきやう
もなく、かたみに見れば、顏はそこら化粧じたりつれど、草の葉の色のやうにて、また赤くなりな
ど、さま〴〵汗水になりて見かはしたり。「さらぬ人だにあざれたるもののぞきは、いと便なき事
にするを、せめてめでたう思召しければ、御悅びに堪へでさばれと思召しつるにこそと思ひなすも
心驕りなむする」と宣ひいまさうじける。

三〇九　【附記】

三一〇　かうやうの事どもを見給ふるまゝには、いとしもこの世の榮華御榮えのみ覺えて、染着の心のいと
どます〳〵に起りつゝ、道心つくべうも侍らぬに、河內國そこ〳〵に住む某の聖人は、庵より出づ
る事もせられねど、後世の責を思へばとて、上り參らせたりけるに、關白殿の參らせ給ひて、雜人
どもを拂ひのゝしるに、これこそは一の人におはしますめれと見奉るに、入道殿の御前にゐさせ給
へば、なほまさらせ給ふなりけりと見奉る程に、また行幸なりて、亂聲し待ちうけ奉らせ給ふさま、

三一一

御輿の入らせ給ふ程など、見奉りつる殿達のかしこまり申させ給へば、なほ國王こそ日本第一の事
なりけれと思ふに、おりおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前についゐさせ給ひて、拜み申させ給
ひしに、「なほ〳〵佛こそ上なくおはしましけれと、この會の庭にはかしこう結緣し申して、道心
なむいとゞ熟し侍りぬる」とこそ申され侍りしか。傍にゐられたりしなりや。まことに忘れ侍りに
けり。

三一二

世の中の人の申すやう、彰子大宮入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女院となむ申す
べき。この御寺に戒壇たてられて、御受戒あるべきなれば、世の中の尼ども參りて受くべきなりと
て、悅びをこそなすなれ。この世繼がをんなどもゝ、かゝる事を傳へ聞きて申すやう、「おのれも、そ
の折にだに白髮の裾そぎてむとなむ。何か制する」と語らひ侍れば、「何せむにか制せむ。たゞさら
む後には、若からむ女のわらはべ求めてえさすばかりぞ」となむいひ侍れば、「我が姪なる女ひと
りあり。それを今よりいひ語らはむ。いとさし離れたらむも、情なき事もぞある」と申せば、「それ
あるまじき事なり。近くも遠くも、身の爲におろかならむ人を、今更に寄すべきかは」となむ語ら
ひ侍る。やう〳〵衣・袈裟などのまうけに、よき絹一二疋求めまうけ侍るなりなどいひて、さすが
にいかにぞや、物あはれげなる氣色の出で來たるは、女どもに背かれむ事の心細きにやとぞ見え侍

三一三

りし。

三一四

さて今年こそは天變頻りにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。かむの殿のかく懷姙せしめ給ひ、院の女御殿の常の御惱の中にも、今年となりては、ひまなくおはしますなるなどこそ、恐ろしう承れ。いでや、かうやうの事を打續け申せば、昔の事こそ只今の樣に覺え侍れ」など見かはして、繁樹がいふやう、「いであはれ、かくさまざまにめでたき事ども、あはれにもそこら多く見聞き侍れどなほわが寶の君に後れ奉りたりしをりのやうに、物の悲しく思ひ給へらるゝ折こそ侍らね。八月十日餘りの事に候ひしかば、折さへこそあはれに、『時しもあれ』とおぼえ侍りしものかな」とて鼻度度かみて、えもいひやらず、いみじと思ひたるさま、まことにその折もかくこそはと見えたれ。「一日片時、生きて世にめぐらふべき心ちもし侍らざりしかど、かくまで候ふは、いよ〳〵ひろごり榮えおはしますを、見奉り悅び申さむとに侍るめり。さて又の年の五月二十四日こそは、冷泉院は誕生せしめ給へりしか。それにつけて、いとゞこそ口惜しき折の嬉しさは、はかりもおはしまさざりしかな」どいへば、世繼、「しか〳〵」と快く思へるさまおろかならず。「朱雀院・村上などの打續き生れおはしましゝは、又いかに」などいふ程、餘りに恐ろしくぞ。

「又世繼が思ふ事こそ侍れ。便なき事なれど、明日とも知らぬ身にて侍れば、たゞ申してむ。この一品の宮の御有樣のゆかしく覺えさせ給ふにこそ、又命惜しく侍れ。その故は、生れおはしまさむとて、いとかしこき夢想見給へしなり。さ覺え侍りし事は、故女院、この大宮など孕まれさせ給はむとて見えし、たゞ同じさまなる夢に侍りしなり。それにてよろづおしはかられさせ給ふ御有樣なり。皇太后宮にいかで啓せしめむと思ひ侍れど、その宮の邊の人にこそえあひ侍らぬがくちをしさに、こゝら集り給へる中に、もしおはしましやすらむと思ひ給へて、かつはかく申し侍るぞ。行く末にもよくいひけるものかなと思しあはする事も侍りなむ」といひし折こそ、「こゝにあり」とて、さしいでまほしかりしか。

三一五

昔物語

いと〳〵あさましく珍かに盡きもせず二人語ひしに、この侍、「いと〳〵興ある事をも承るかな。さても物の覺えはじめは何事ぞや。それこそまづ聞かまほしけれ。語られよ」といへば、世繼、「六七歳より見聞き侍りし事は、いとよく覺え侍れど、その事となきは證なければ、用ゐる人も候はじ。九つに侍りし時の大事を申し侍らむ。小松の帝の親王にておはしましゝ時の御所は、皆人知りて侍り。おのが親の候ひし所、大炊の御門よりは北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば宮の傍にて、常

三一六

に参りて遊び侍りしかば、いと閑散にてこそおはしましゝか。二月の三日初午といへど、甲午の最吉日、常よりも世こぞりて、稲荷詣にのゝしりしかば、父の詣で侍りし供にしたひまゐりて侍る。さは申せど幼き程にて、坂のこはきを登りはべりしかば、困じて、えその日の中に、還向仕うまつらざりしかば、父がやがてその御社の禰宜の大夫が後見仕うまつりて、いとうるさくて候ひし宿に罷り寄りて、一夜は宿りして、又の日歸り侍りしに、東の洞院より上りにまかるに、大炊の御門より西ざまに、人々のさゝと走れば、怪しくて見候ひしかば、わが家の程にしも、いと黒うなるまで人立ちこみて見ゆるに、いとゞ驚かれて、若し燒亡かと思ひて、上を見上ぐれば煙も立たず。さは大きなる追捕かなと、かたゞに心もなきまで惑ひまかりしかば、小野宮の程にて、上達部の御車や、鞍置きたる馬ども、冠うへのきぬ着たる人々などの見え侍りしに、心得ず怪しくて、「何事ぞ、何事ぞ」と人毎に問ひ候ひしかば、「式部卿の宮、帝にゐさせ給ふとて、大殿をはじめ奉りて、皆人まゐらせ給へるなり」とて、急ぎまかりしなどぞ、物覺えたる事にて見給へし。

又七つばかりにや、元慶六年ばかりにや侍りけむ。式部卿の宮の侍從と申しゝぞ寛平の天皇。常に狩を好ませおはしまして、霜月の二十餘日の程にや、鷹狩に式部卿の宮より出でおはしましゝ御供に、走り參りて侍り。賀茂の堤のそこ〳〵なる所に、侍從殿鷹使はせ給ひて、いみじう興に入らせ

三一七

三一八

給へる程に、俄に霧立ちて、世間もかい暗がりて侍りしに、東西も覺えず。暮のいぬるにやと覺えて、藪の中に倒れ伏して、わなゝき惑ひ候ふほど、時なかばかりや侍りけむ。後にぞ承れば、賀茂の明神の現はれおはしまして、侍從殿に物申させおはしましける程なりけり。その事は皆世に申しおかれて侍るなれば、なか〳〵申さじ。知ろしめしたらむ、あはそかに申すべきにも侍らず。さて後六年ばかりありてや、賀茂の臨時の祭始まりけむ。位に卽かせおはしましゝ年とぞ覺え侍る。その日の、酉の日にて侍りければ、やがて霜月の果の酉の日にては侍るぞ。はじめたる東遊びの歌、敏行の中將ぞかし。

ちはやぶるかものやしろのひめこ松よろづよまでも色はかはらじ

古今に入りて侍り。皆人知ろしめしたる事なれど、いみじく詠み給へるぬしかな。今に絶えずひろごらせ給へる御末とか「どもか」。みかどゝ申せど、かくしもやはおはします。

八幡の臨時の祭、朱雀院の御時よりぞかし。朱雀院生れさせ給ひて三年は、おはします殿の御格子まゐらず。夜晝火をともして、御帳の内にておほし立て奉らせ給ふ。北野におぢ申させ給ひて。天暦の帝をばいとさも守り奉らせ給はず。いみじき折節に生れさせ給へるぞかし。朱雀院生れおはしまさずば、藤氏の御榮え、いとかうしも侍らざらまし。さて位に卽かせ給ひて、將門が亂出で來

三一九

て、その御願にてとぞ承りし。その東遊びの歌、貫之のぬしぞかし。

松もおひまたもこけむすいはしみづゆくすゑとほくつかへまつらむ

集にも書きて侍るぞかし」といへば、また繁樹、「この翁も、あのぬしの申されつるがごと、くだくだしき事は申さじ。同じ事のやうなれど、寛平・延喜などの御譲位の程の事などは、いとかしこくたしかに覺え侍るをや。

伊勢の君の弘徽殿の壁に書きつけ給へりし歌こそは、そのかみのあはれなる事と、人申しゝか。

わかるれどあひも思はぬもゝしきを見さらむ事のなにか悲しき

三二〇

法皇の御返し、

身ひとつのあらぬばかりをおしなべてゆきかへりてもなどか見さらむ

三二一

といへば、傍なる人、「法皇の書かせ給へりけるを、延喜の、後に御覽じつけて、かたはらに書きつけさせ給へるとも承るは、いづれかまことならむ」

繁樹「同じ帝と申せど、その御時に生れあひて候ひけるは、あやしの民のかまどまで、やむごとなくこそ。大小寒のころほひ、いみじう雪降りさえたる夜は、諸國の民百姓いかに寒からむとて、御衣をこそ、夜の御殿より投げ出しおはしましければ、おのれらまでも、惠みあはれびられ奉りて侍る身と、おもだたしうこそは。さればその世に見給へし事は、なほ末までもいみじき事と覺え侍るぞ。人々聞し召せ。この座にて申すは憚あることなれど、かつは若く候ひし程、いみじと身にしみて思ひ給へし罪も今にうせ侍らじ、今日この伽藍にて懺悔仕うまつりてむとなり。

三二二

教賞　六條の式部卿の宮と申しゝは、延喜の帝の一つ腹の御はらからにおはします。野の行幸せさせ給ひしに、この宮供奉せしめ給ふべかりけれど、京の程遅参せさせ給ひて、桂の里にぞ参りあはせ給へりしかば、御輿止めて、先立て奉らせ給ひしに、某といひし犬飼の、犬の前足を二つながら肩に引こして深き河の瀬渡りしこそ、行幸に仕うまつり給へる人々、さながら興じ給はぬなく、帝も興ありげに思したる御氣色にこそ見えおはしましゝか。さて山口入らせ給ひし程に、しらせうといひし御鷹の、鳥をとりながら、御輿の鳳の上に飛び参りて候ひし、やう〳〵日は山の端に入りがたに、光のいみじうさして、山の紅葉錦を張りたるやうなるに、鷹の色はいと白くて、雉子は紺青のやうにて、羽打廣げてゐて候ひし程は、まことに雪少し打散りて、折ふし取集めて、さる事やは候ひしと よ。身にしむばかり思ひ給へしかば、いかに罪え侍りけむ」とて、爪はじきはた〳〵とす。

繁樹　大方延喜の帝・常にゑみてぞおはしましける。その故は、「まめだちたる人には物いひにくし。打とけたる氣色につきてなむ、人は物はいひよき。されば大小の事聞かむが爲なり」とぞ仰せ言あり

三二四

ける。[註]それさる事なり。(一)けにくき顔には物いひふれにくきものなり。さて、「(醍醐)われいかでか、七月・九月(二)に死にせじ。[註]相撲の節・九日の節の停らむが口をしきに」と仰せられけれど、九月にうせさせ給ひて、九日の節はそれよりとゞまりたるなり。その日、[註]左衛門の陣の前にて、御鷹ども放たれしは、あはれなりしものかな、[註]とみにこそとびのかざりしか。

[註]公忠の辨をば、大方の事にとりても、(四)やむごとなき者に思召したりし中にも、鷹の方さまにはいみじう興ぜさせ給ひしなり。日々に政事を勤め給ひて、馬を何處にぞや立て給ひて、事果つるまにこそ、[註]中山へはいませしか。(六)官のつかさの辨の曹司の壁には、その殿の(公忠)鷹のもの(七)[註]は未だつきて侍らむ。久世の鳥、交野の鳥の味はひは、[註]参り知りたりき。「かたへは、虚言を宣ふにこそ。試みたいまつらむ」とて、みそかに二所の鳥をつくりまぜて、しるしをつけて、人の参りたりければ、聊か取違へず、これは久世の、これは交野のなりとこそ参り知りたりけれ。かゝりければ、「(四)ひたぶるの鷹飼にて候ふ者の、殿上に候ふこそ見苦しけれ」と、[註](醍醐)延喜に奏し申す人のおはしけれど、「(帝)公事を疎かにして狩をのみせばこそ、[註]罪は有らめ。一度政事をも缺かで、公事をよろづ勤めて後にともかくもあらむは、(五)なでふ事かあらむ」とこそ仰せられけれ。

(六)いで又いみじく侍りしことは、(七)やがて同じ君の[註](醍醐)大井河の行幸に、[註]富小路の御息所の御腹の[註](雅明親王)御子の

三二五

七歳にて舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人(八)しほたれぬ人侍らざりき。餘り御かたちの光るやうにし給ひしかば、山の神めでゝ取奉り給ひてしぞかし。その御時にいと面白き事ども多く侍りきや。大方申しつくすべきならず。まづ申すべき事をも、たゞ覺ゆるに從ひて、(九)しどけなく申さむ。

法皇(宇多)のところ〳〵修行し遊ばせ給ひて、[註]宮の瀧御覽ぜし程こそいみじう侍りしか。その折菅原(道真)の大臣の遊ばしたりし和歌、

[註]みづひきのしらいとはへておるはたは旅の衣にたちやかさねむ

[註]大井の御幸も侍りしぞかし。(一)さて「又行幸ありぬべき所」と申[註]させ給ふ、事の由奏せむとて、小(忠平)

[註]をぐら山もみぢの色も心あらば今ひとたびのみゆきまたなむ

あはれ優にも候ひしものかな。さて行幸に數多の題賜はりて、やまと歌仕うまつりし中に、「猿

三二六

叫ニ山峽一」といふ題を、躬恒、

[註]わびしらにましらな啼きそあし引の山のかひある今日にやはあらぬ

その日の序[註]題は、(一)やがて貫之の主こそ仕うまつりしか。[註]

さてまた朱雀院も優におはしますとこそはいはれさせ給ひしかども、將門が亂など出で來て、お
それ過ぐさせおはしましゝ程に、やがて代らせ給ひにしぞかし。その程の事こそいと怪しう侍りけ
三二七 れ。母后の御もとに行幸せさせ給へりしを、かゝる御有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事など奏せさ
せ給ひて、「今は東宮ぞ、かくて見聞えさせまほしき」と申させ給ひけるを、心もとなく急ぎ思召す
事にこそありけれとて、程もなく讓り聞えさせ給ひけるに、后の宮は、「さ思ひても申さゞりしこ
とを、たゞ〳〵末の事をこそ思ひしか」とて、いみじく嘆かせ給ひけり。さておりさせ給ひて後、
人々の嘆きけるを御覽じて、院より后の宮に聞えさせ給へりし、國讓りの日、
三二八 日の光いでそふけふのしぐるゝはいづれのかたの山べなるらむ
后の宮の御返し、
しら雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のひかりながらに
などぞ聞え侍りし。院は數月、綾綺殿にこそおはしましゝか。後には少し悔い思召す事ありて、位
にかへりつかせ給ふべき御祈などせさせ給ひけりとあるはまことにや。御心いとなまめかしくおは
しましゝ。御こゝち重くならせ給ひて、太皇太后宮の幼くおはしますを見奉らせ給ひて、いみじく
しほたれさせ給ひて、

三二九 くれ竹のわが世はことになりぬともねはたえせずぞなほなかるべき
三三〇 まことに悲しくあはれにこそ承りしか。
村上の帝、はた申すべきならず、なつかしうなまめきたる方は、延喜にも優り申させ給へりとこ
そ人申すめりしか。「われをば人は如何いふなる」と人に問はせ給ひけるに、「ゆるになむおはしま
すと、世には申す」と奏しければ、「さてはほむるなゝり。王の嚴しくなりなば、世の人いかゞ堪へむ」
とこそ仰せられけれ。いとをかしうあはれに侍りし事は、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の
木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、某のぬしの藏人にていますがりし時、承りて、「若き者ど
もはえ見知らじ。きむぢ求めよ」と宣ひしかば、一京まかり歩きしかども侍らざりしに、西の京の
三三一 そこ〳〵なる家に、色こく咲きたる木の、やうだいうつくしきが侍りしを、ほりとりしかば、家ある
じの、「木にこれゆひつけてもて參れ」といはせたうびしかば、あるやうこそはとて、もて參りて候
ひしを、「何ぞ」とて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける、
勅なればいともかしこしうぐひすの宿はととはゞいかゞ答へむ
とありけるに、怪しく思召されて、「何者の家ぞ」と尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしのみむす
めの住む所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。繁樹今生

三三二

の辱詞(七)は、これや侍りけむ。(八)さるは、思ふやうなる木もて參りたりとて、衣(一)かづけられたりしも、辛くなりにき」とて、(二)細やかに笑ふ。「繁樹又い(三)と切にやさしく(四)思ひ給へし事は、この同じ御時の事なり。承香殿の女御と申すは、齋宮の女御よ。帝久しく渡らせ給はざりける秋の夕暮に、琴をい(註)とめでたくひき給ひければ、急ぎ渡らせ給ひて、御傍におはしましけれど、人やあるとも思したらで、せめてひき給ふを聞し召せば、(五)

註　さらぬだにあやしきほどの夕暮に荻ふく風の音ぞきこゆる

三三三

とひきたりし程こそ切なりしかと、御集に侍るこそいみじう候へ」といふは、餘り忝しやな。ある人、「城外やし給へりし」といへば、「遠國には罷らず。和泉の國にこそ貫之ぬしの御任に、下(一)りて侍りしか。『註ありとほしをば思ふべしやは』とよまれて待りし度の供にも候ひき」雨の降りしさまなど語りしこそ、古草子にあるを見れば、程經たる心地し侍るに、昔にあひたる心地してをかしかりしか。この侍もいみじう興じて、繁樹が女に「をんなどもこそ、今少し細やかなる事どもは語られめ」といへば、「妻われは京人にても侍らず。高き宮仕へなどもし侍らず。若くよりこの翁に添ひて候ひにしかば、はか〴〵しき事をも見給へぬものをば」といらふれば、「侍いづれの國人ぞ」と問ふ。「妻陸奥國安積の沼にぞ侍りし」といふ。「侍いかで京にはこしぞ」と問へば、「妻その人とはえ知り

三三四

奉らず、うたよみ給ひし北の方おはせし守の御任にぞ、上り侍りし」といふに、中(註)務の君にこそと聞くもをかしくなりぬ。「侍いといたきことかな。北の方を誰とか聞えし。よみ給ひけむ歌はおぼゆや」といへば、「妻その方に心も得で、覺え侍らず。たゞ上り給ひしに、逢坂の關におはしてよみ給へりし歌こそ、ところどころおぼえ侍れ」とて、

註　みやこにはまつらむものをあふさかのせきまできぬとつげややらまし

などいとたど〳〵しげに語るさま、まことに、男にたとしへなし。

三三五

繁樹、「註中務この人をば人とおぼえずとよ。さやうの方は覺ゆらむものぞ」「世間魂はしも、いとかしこく侍るを取り所にて、えさり難く思ひ給ふるなり」といふに、世繼、「いでこの翁の女人こそ、いとかしこく物は覺え侍れ。今一めぐりがこのかみにて候へば、見給へぬ程の事なども、妻あれは知りて侍るめり。染殿の后の宮のひすまし(註)に侍りけり。母もかん(註)の刀自にて仕う奉りければ、幼くより參り通ひて、忠仁公をも見奉りけり。わらはべがたちの程の、いと物ぎたなうも候はざりけるにや、やむごとなき君達も御覽じいれて、兼輔(註)の中納言、良峯宗(註)樹の宰相の御文なども持ちて侍るめり。中納言はみちのくに紙に書かれ、宰相のは胡桃色(註)の薄様(註)にてぞ侍るめる。

この宰相は、五十までさせる事なく、ほと〳〵おほやけに捨てられたるやうにていますがりける(七)

が、八幡に参らせ給ひたるに、雨いみじう降るに、石清水の坂登り煩ひつゝ参り給へるに、御前の

三三六

橘の木の少し枯れて侍りけるに立寄りて、

【附記】

ちはやぶる神のおまへのたちばなももろきもともにおいにけるかな

とよみ給へば、神聞きあはれびさせ給ひて、橘も榮え、宰相も思ひかけず頭になりて、宰相までなり給ふとこそ承りしか」といへば、侍「賀茂の御前にとかや、遙かの世の物語に童申し侍るめるは」といらふれば、「さもや侍りけむ。程經て僻事も申し侍らむ。宰相をば見奉りしかど、人となりてこそ尋ね承れ」といらふ。侍、「そは、さなり。その宰相は五十六にてぞ宰相になり、左近中將かけてこそいませしか」

三三七

「その折は何とも覺え侍らざりしかど、この頃思ひ出で侍れば、見苦しかりけることかなと思ひ侍る」この侍、「いかで、さる有識をば物げなき若人にてはとりこめられしぞ」と問へば、「さればこそ、さやうにすきおき候ひしものゝ、心にもあらず、世繼が家にはまうで來寄りては、恥にして、いかばかりのいさかひ侍りしかど、さばかりに、てかけそめて、あからめせさせ侍りなむや。さる程にねつき候ひては、翁をまた一夜も外目せさせ侍らぬをや」とほゝゑみたる口つき、いとをこがまし。

「又この女どもゝ世繼も、しかるべきにて侍りけるぞ。かの女二百歳ばかりにて侍り。兼輔の中納言・

三三八

業樹の宰相も、今まであとかばねだにいませず、いかゞし侍らまし。世繼も今様の若き女ども、更に語らはれ侍らじ。かゝる命長のいきあはず侍らましかば、いとあやしう侍らまし」とてこゝろよく笑ふ。げにと聞えてをかしくもあり。きくもうつゝの事とも覺えず。「あはれ今日具して侍らましかば、女房たちの御耳に、今少しとまる事どもは聞かせ給ひてまし。私の頼む人にては、兵衛ノ内侍の御親をぞし侍りしかば、内侍のもとへは時々まかるめりき」といふに、「とは誰にか」といふ人のあれば、「いでこの高名の琵琶ひきよ。相撲の節に玄上たまはりて、御前にて青海波仕うまつられたりしは、いみじかりしものかな。博雅ノ三位などだに、おぼろげにはえ鳴らし給はざりけるに、これは承明門まで聞え侍りしかば、左の樂屋にまかりて承りしぞかし。

かやうに物のはえかひ〳〵しき事どもゝ、天暦の御時までなり。冷泉院の御代になりてこそ、さはいへど、世はくれふたがりたる心地し侍りしか。世の衰ふる事も、その御時よりなり。小野宮殿も、

三三九

一の人と申せど、よそ人にならせ給ひて、若く花やかなる御伯父達に打任せ奉らせ給ふ。また帝は申すべきにあらず。あはれに候ひける事は、村上うせおはしまして、またの年小野の宮に人々まゐり給ひて、いと臨時客などはなければ、嘉辰令月など打誦ぜさせ給ふついでに、一條左大臣殿・六條殿など拍子とりて席田うち出でさせ給ひけるに、「あはれ先帝のおはしまさましかば」とて御笏も

打おきつゝ、實頼あるじ殿をはじめ奉りて、註事忌もせさせ給はず、上の御衣どもの袖濡れさせ給ひにけり。さる事なりや。何事も聞き知り見分く人のあるはかひあり、なきはいと口惜しきわざなり。今日かゝる事ども申すも、わどのゝ聞きわかせ給へば、いとゞ今少しも申さまほしきなりといへば、侍もあまえたりき。

三四〇

藤氏の御事をのみ申し侍るに、源氏の御事も珍しう申し侍らん。この一條殿・六條殿たちは、六條の一品式部卿の宮の御子どもにおはしまさふ。寛平の御孫なりとばかりは申しながら、人の御ありさま有識におはしまして、いづれをも村上の帝時めかし申させ給ひしに、今少し六條殿をば愛し申させ給へりけり。兄殿はいと餘りうるはしく、公事より外の事は多分には申させ給はで、ゆるぎたる所のおはしまさゞりしなり。弟殿はみそか事には無才にぞおはしましゝかど、若らかに愛敬づき、なつかしき方は勝らせ給へりしかばなゝめりとぞ人申しゝ。父宮は出家せさせ給ひて、註仁和寺におはしましゝかば、六條殿、修理ノ大夫にておはしましゝ程なれば、仁和寺へ參らせ給ふ往き還りの道を、一度は東の大宮より上らせ給ひて、一條より西ざまにおはしまし、又一度は西の大宮より下らせ給ひて、二條より東ざまなどに過ぎさせ給ひつゝ、内裏を御覽じて、破れたる所あれば、修理せさせ給へり。いと手きゝたる御心ばへになりな。

三四一

又一條殿の仰せられけるは、「親王たちの中にて、世の案内も知らず、たづきなかりしかば、さるべき公事の折は、人より先に參り、事果てゝも最末に退り出でなどして見習ひしなり」とぞ宣はせける。八幡の放生會には御馬奉らせ給ひしを、御使などにも淨衣を賜はせ、御自らも清まはらせ給ひしかばにや、御前近き木に、山鳩の必ずゐて、ひき出づる折に飛び立ちければ、かひありと喜び興ぜさせ給ひけり。御心いとゞうるはしくおはします人の、信を致させ給ひしかば、大菩薩の受け申させ給へりけるにこそ。一年の旱の御祈にこそは、東三條殿の御賀茂詣せさせ給ひしには、この一條殿も參らせ給ひき。大臣にならせ給ひぬれば、さる例なけれども、天下の大事なりとて、御出立の所にはおはしまさで、我が御殿の前わたらせ給ひし程に、ひき出でゝ具し申させ給ひしなり。この生には、御數珠とらせ給ふ事はなくて、たゞ毎日に、南無八幡大菩薩・南無金峯山金剛藏王・南無大般若波羅蜜多心經と、冬の御扇を數に取りて、一百八遍づゝぞ念じ申させ給ひける。それより外の御勤めせさせ給はず。四條の大后ノ宮に、かくなむと申す人のありければ、聞かせ給ひて、「なつかしからぬ御本尊かな」とぞ仰せられける。

三四二

此の殿こそ、「あらたにおふる」をば、なべての樣に、謠ひ變へさせ給ひけれ。一條院の御時の、臨時ノ祭の御前の事果てゝ、上達部達の物見に出でたまひしに、外記のすみの程過ぎさせ給ふとて、わ

三四三

さとはなくて、口ずさみのやうに謠はせ給ひしが、なか〳〵優に覺え侍りし。「とみくさの花手につ
みいれて宮へ參らむ」の程を、例のには變りたるやうに承りしかば、遠き程に、老の僻耳にこそは
(四)と思ひ給へしを、この按察使大納言殿も、しかぞ宣はせける。「殿上人にてありしかば、遠くてよ
くも聞かざりき。變りたりしやうの、めづらしうさま變りて覺えしは、あの殿の御事なりしかばに
や。又も聞かまほしかりしかど、さもなくてやみにしこそ、今に口惜しく覺ゆれ」とこそ宣ふなれ。
この大臣殿たちの御弟の大納言、優におはしましき。大方六條の宮の御子どもの、皆めでたくおは
しましゝなり。御法師子は廣澤の僧正・勸修寺の僧正、二所こそはおはしましゝか。大方その程に
は、かた〴〵につけつゝ、いみじき人々のおはしましゝものをやといへば、「この頃もさやうの人
はおはしまさずやはある」と侍のいへば、「この四人の大納言達よな。齊信・公任・行成・俊賢など申
す君達は、また更なり」

さて又多くの物見し侍りし中にも、花山院の御時の石清水の臨時の祭、圓融院の御覽ぜしばかり
興ある事候はざりき。その折の藏人の頭にては、今の小野宮の右大臣殿ぞおはしましゝ。御前の事
果てけるまゝに、院はつれ〴〵におはしますらむかしと思召して參らせ給へりければ、さるべき人も
候ひ給はざりけり。藏人・判官代ばかりして、いと〴〵さう〴〵しげにておはします。かく參らせ給

三四四

へるを、いと時よう思召したる御氣色を、いとあはれに、心苦しう見參らせさせ給ひて、「物御覽ぜ
よ」など御けしき賜はらせ給へば、「俄には如何あるべからむ」と仰せられけるを、「かくて實資候
へば、又殿上に候ふ男どもばかりにてあへ侍りなむ」とそゝのかし申させたまふ。御厩の御馬ども
めして、候ひし限り御前つかうまつり、頭ノ中將は、束帶ながら參り給ふ。

堀川の院なれば、程ちかく出でさせ給ふに、物見車ども二條大宮の辻に立かたまりて見るに、布衣・
衣冠なる御前したる車の、いみじう人拂ひ、なべてならぬ勢なるが來れば、誰ばかりならむと、怪し
く思ひあへるに、頭中將下襲の尻挾みて、うつし置きたる馬に乘りておはするに、院のおはしますな
りけりと見て、車どもゝ、かち人も手まどひし立騷ぎて、いと物騷がし。二條よりは少し北に寄りて、
冷泉院の築地面に御車立てつ。御前どもおりて候ひなみ給ふ程に、內より見物しに引續き出で給ふ
上達部たちの見給ふに、大路のいみじくのゝしれば、怪しくて、「何事ぞ」と問はせ給ふに、「院の
おはしますなり」と申しけるを、世にあらじと思すに、「頭ノ中將殿もおはします」といふにぞ、ま

三四五

ことなりけりと覺えつゝ、御車より急ぎおりつゝ、皆參り給ひし。大臣二人は左右の御車のどう打
抑へて立たせ給へり。東三條殿・一條左大臣殿よ。さて納言以下は、轅のこなたかなたにゐなませ
給ふ。殿上人は御車の後轅の方に候ひ給ふ。なか〳〵、うるはしからむ事の作法よりも、めでたく

侍りしものかな。

舞人・陪従は、みな乗りて渡るに、時中の源大納言の、未だ大蔵卿と申しゝ折ぞ、使にておはせし、御車の前近く立止まりて、求子を、袖のけしきばかり仕う奉り給ひて、ついゐ給ひしまゝに、御かた袖を顔に押當てゝ候ひ給ひしかば、香なる御扇さし出させ給ひて、「はやう」と書かせ給ひしかばこそ、少し押拭ひて立ち給ひしか。すべてさばかり優なること又候ひなむや。げにあはれなる事のさまなれば、人々も御氣色かはり、院の御前にも少し涙ぐみおはしましけりとぞ、後に承りし。神泉の丑寅のすみの垣の内にて見給へしなり。

三四六

又若く侍りし折も、佛法うとくて、世のゝしる大法會ならぬには、罷りあふ事もなかりしに、まして年積りては、動き難く候ひしかど、参河入道殿の入唐のうまのはなむけの講師、清昭法橋のせられし日こそ罷りたりしか。さばかり道心なき者の、始めて心起る事こそ候はざりしか。まづは神分の心經、表白のたうびて、鐘うち給へりしに、そこばく集りたりし萬人、さとこそ泣きて侍りしか。それは道理の事なり。又清範律師の、犬の爲に法事しける人の講師に請ぜられていくを、清昭法橋同じほどの說法者なれば、いかゞすると、聽きに、頭つゝみて、誰ともなくて聽聞しければ、「只今や過去聖靈は、蓮臺の上にて、ひよと吠え給ふらむ」と宣ひけるを、「されば」こそ、こと人はかく思ひ寄りなましや。なほかやうの魂ある事は、勝れたる御房ぞかし」とこそほめ給ひけれ。實に承りしに、をかしくこそ候ひしか。されば又聽聞の衆ども、さゝと笑ひてまかり歸りにき。いと輕々なる往生人なりやな。むげによしなし事に侍れど、人のかど〳〵しく魂ある事の、興ありて優に覺え侍りしかばなり。

三四七

法成寺の五大堂供養は、十二月には侍らずやな。極めて寒かりし頃、百僧なりしかば、御堂の北の庇にこそは、題名僧の座はせられたりしか。その料に、その御堂の庇は入れられたるなり。わざとの僧膳はせさせ給はで、湯漬ばかり賜ふ。行事二人に五十人づゝ分たせ給ひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎を立てゝ、湯をたぎらかしつゝおものを入れて、いみじう熱くて参らせ渡したるを、ぬるくこそはあらめと、僧達思ひて、さぶ〳〵と参りたるに、はしたなききはに熱かりければ、北風はいと冷たきに、さばかりにはあらで、いとよく参りたる御房達もいまさうじけり。後に、道長「北向きの座にて、いかに寒かりけむ」など、殿の問はせ給ひければ、「しか〳〵候ひしかば、こよなく暖まりて寒さも忘れ侍りにき」と申されければ、行事たちをいとよしと思召したりけり。ぬるくて参りたりとも、別の勘當などあるべきにはあらねど、殿をはじめ奉りて人にほめられ、行く末にもさこそありけれといはれたうばむは、たゞなるよりはあしからず、よき事ぞかし。

三四九

いでまた、故女院の御賀に、この關白殿、陵王・春宮、大夫殿、納蘇利舞はせ給へりしめでたさはいかにぞ。陵王はいとけだかくあてに舞はせ給ひて、御祿賜はらせ給ひても、舞ひ捨てゝ、知らぬさまにて入らせ給ひぬる、美しさめでたさに竝ぶ事あらじと見參らするに、納蘇利のいとかしこく、又かうこそはありけれと見えて舞はせ給ふに、御祿を、これはいとしたゝかに御肩に懸けさせ給ひて、今一かへり、えもいはず舞はせ給へりし興は、又かゝるべかりけるわざかなとこそ覺え侍りしか。御師の、陵王は必ず御祿は捨てさせ給ひてむぞ。同じさまにせさせ給はむ、目馴れたるべければ、さまかへさせ奉り給へるなりけり。心ばせ勝りたりとこそいはれ侍りしか。女院かうぶり賜はせしは、大夫殿をいみじくかなしがり申させ給へばとぞ。陵王の御師は賜はらで、いと辛かりけり。それにこそ北の政所、少しむづからせ給ひけれ。さて後にこそ賜はすめりしか。かたのやうに舞はせ給ふとも、あしかるべき御年の程にもおはしまさず、わろしと人申すべくも侍らざりしに、二所ながら、この世の人と見えさせ給はで、天童などの降り來たるとこそ見えさせ給ひしか。

三五〇

又、此の大宮の大原野の行啓は、いみじく侍りし事ぞや。雨の降りしこそいと口惜しう侍りし事よ。舞人には誰々それ〴〵の君達など數へて、一の舞はこの關白殿の君にこそは舞はせ給ひしか。試樂の日搔練襲の下襲に、黑半臂奉りたりしは、珍しく侍りしものかな。闕腋に人の著給へりしを、

まだ見侍らざりしかば。行啓には、入道殿なにがしといふ御馬に奉りて、御隨身四人と、らんもむにあげさせ給へりしは輕々しかりしものかな。公忠が少し控へつゝ所おき申しゝを、制せさせ給ひしかば、なほ少し恐れ申してこそありしか。かしこく京の程は雨も降らざりしぞかし。閑院の太政大臣殿の、西の七條より歸らせ給ひしをこそ、入道殿いみじう恨み申させ給ひけれ。堀川の左大臣殿は、御社までつかうまつらせ給ひて、御引出物御馬ありき。枇杷殿の宮、中宮とは、黃金作りの御車にて、まうち君だちのやんごとなき限りえらせ給へる御前、具し申させ給へりき。御車のしりには、皇太后宮の御めのと、維經のぬしの御母、中宮の御めのと、兼安・實任ぬしの御母こそさぶらひけれ。殿の君達のまだ男にならせ給はぬ、童にて、皆仕うまつらせ給へりき。

三五一

又、ついでなき事には侍れど、物の怪と人の申しゝ事どもの、させる事なくてやみにしは、前の一條院の御卽位の日、大極殿の御裝束すとて、人々集りたるに、高御座の中に、髮つきたるものゝ頭の、血打つきたるを見付けたりける、あさましくいかゞすべきと、行事思ひあつかひて、かばかりの事を隱すべきかはとて、大入道殿に、一かゝる事なむ候ふ」と、某のぬしゝて申させけるを、いとねぶたげなる御氣色にもてなさせ給ひて、物も仰せられねば、もし聞し召さぬにやとて、又御けしき賜はれど、打眠らせ給ひて、なほ御いらへなし。いと怪しく、さまで御殿籠り入りたるとは見えさ

せ給はぬに、いかなればかくておはしますぞと思ひて、とばかり御前に候ふに、打おどろかせ給ふさまにて、「御裝束は果てぬるにや」と仰せらるゝに、聞かせ給はぬ様にてあらむと思召しけるにこそと心得て、立ちたうびけり。げにかばかりの祝の御事、又今日になりてとまらむも忌々しきに、やをら引隠してあるべかりける事を、心ぎもなく申すものかなと、いかに思召しつらむと、後にぞその殿もいみじく悔しがり給ひける。さる事なりかしな。されば、なでふ事かはおはします。よき事にこそありけれ。又大宮のいまだ幼くおはしましける時、北の政所具し奉らせ給ひて、春日にまゐらせ奉りけるに、御前のものどもの、參らせするたりけるを、俄につじ風の吹きまつひて、東大寺の大佛殿の御前に落したりけるを、春日の御前なるものゝ、源氏の氏寺に取られたるを、よからぬ事にやと、これをもその折世人申しゝかど、永く御末榮え給ふは、吉さうにこそはありけれとぞ覺え侍るな。夢も現もこれはよき事と人申せど、させる事なくてやむこと侍り。又かやうに怪だちて見給へ聞ゆる事も、かくよき事も候ふな。

三五三

まことに世の中に、いくそばくあはれにもめでたくも、興ありて承り見給へ集めたる事の、數知らず積りて侍る翁どもとか、人々思召す。やむごとなくも、又下りても、ま近く御簾すだれの内ばかりやおぼつかなさ殘りて侍らむ。それなりとも、おの〳〵、宮・殿ばら・次々の人の御あたりに、人の打聞くばかりの事は、女房・わらはべ申し傳へぬやうやは侍る。さればそれも不意に傳へ承らずしも候はず。されどそれをば何とかは語り申さむずる。たゞ世にとりて、人の御耳留めさせ給ひぬべかりし昔の事ばかりを、かく語り申すだに、いとをこがましげに、御覽じおこする人もおはすめり。今日はたゞ、殿のめづらしう興ありげに思して、あどをようたせ給ふにはやされ奉りて、かばかりも口あけそめて侍れば、なか〳〵殘り多く、又々申すべき事は期も無く侍るを、もしまことに聞し召しはてまほしくば、駄一疋を賜はせよ。はひ乘りて參り侍らむ。且は又御宿りに參じて、殿の御才學の程も承らまほしう思ひ給ふるやうは、いまだ年頃かばかりもさしいらへし給ふ人に、對面たまはらぬに、時々加へさせ給ふ御言葉の、見奉るは翁らがやしは子の程にこそはと覺えさせ給ふに、この知ろしめしげなる事どもは、思ふに古き御日記などを御覽ずるならむかしと心憎く、下萬はさばかりの才はいかでか侍らむ。たゞ見聞き給へし事を、心に思ひおきて、かくさかしがり申すにこそあれ。まこと、人にあひ奉りては、思し咎め給ふ事も侍らむと、はづかしうおはしませば、老の學問にも承りあかさまほしうこそ侍れ」といへば、繁樹もたゞ、「かうなり、かうなり。さらむ折は、必ず告げ給ふべきなり。杖にかゝりても參りあひ申し侍らむ」とうなづきあはす。

「たゞし、さまでのわきまへおはせぬ若き人々は、そら物語する翁かなと思すもあらむ。わが心に

三五五

覺えて、一言も空しき事加へて侍らば、この御寺の三寶、今日の座の戒和尚に請ぜられ給ふ佛菩薩を證とし奉らむ。中にも若うより十戒の中に、妄語をば保ちて侍る身なればこそ、かく命をば保たれて候へ。今日この御寺の、むねとそれを授け給ふ講の庭にしも參りて、あやまち申すべきならず。大かた世の初めは、人の命は八萬歳なり。それがやう〳〵減じもていきて、百歳になる時に、佛は出でおはしましたるなり。されど生死の定なき由を人に示し給ふとて、なほ今二十年つゞめて、八十と申しゝ年、入滅せさせ給ひにき。その年より今年まで、一千九百七十三年にぞなり侍りぬる。釋迦如來滅し給ふを期にて、八十にきはむべけれども、佛、人の命を不定なりと見せさせ給ふにや、この頃も、九十、百の人、おのづから聞え侍るめれど、この翁どもの命は稀なる事、甚深甚深、希有希有なりとはこれを申すべきなり。いと昔はかばりの人侍り。神武天皇をはじめ奉りて、二十餘代までの間に、十代ばかりが程は、百歳、百餘歳までは持ち給へる帝もおはしましたれど、末代には、けやけき命もちて侍る翁どもなりかし。かゝれば、前生にも戒をうけ保ちて候ひけると思ひ給ふれば、この生にも破らで罷り歸らむと思ひ給ふるなり。今日この御堂に影向し給ふらむ神明冥道たちも聞し召せ」と打いひて、したり顔に扇打使ひつゝ、見かはしたる氣色、ことわりに、何事よりも公私羨ましくこそ侍りしか。

三五六

繁樹「さても〳〵、繁樹が年かぞへさせ給へ。たゞなるよりは年を知り侍らぬが口惜しきに」といへば、侍「いで〳〵」とて、「十三にておほき大殿に參りきと宣へば、十ばかりにて、陽成院おりさせ給ふ年はいますがりけるにこそ。これにて推思ふに、あの世繼の主は今十餘年が弟にこそあめれば、百七十には少し餘り、八十にも及ばれにたるべし」など、手を折り數へて、「いとかばかりの御年どもは、相人などに相ぜられやせし」と問へば、「させる人にも見え侍らざりき。たゞ高麗人のもとに、二人つれてまかりたりしかば、『二人長命』と申しゝかど、いとかばかりまで候ふべしとは思ひ掛け候ふべき事かは、こと事問はむと思ひ給へし程に、昭宣公の君達三人おはしましにしかば、え申さずなりにき。それぞかし、時平の大臣をば、『御かたちすぐれ、心魂かしこくて、日本の固めと用ゐむに餘らせ給へり』と申す。枇杷殿をば、『餘り御心うるはしくすなほにて、諂ひかざりたる小國にはおはせぬ御相なり』と申す。貞信公をば、『あはれ日本國の固めや。ながく世を繼ぎ門を開く事、たゞこの殿』と申したれば、『われをあるが中に才なく諂曲なりと、かくいふははづかしき事』と仰せられけるは。されどその儀に違はせ給はず、門をひらき榮華を開かせ給へば、なほいみじかりけりと思ひ侍りて、又まかりたりしに、小野宮殿おはしましゝかば、え申さずなりにき。殊更にあやしき姿を作りて、下薦の中に遠くゐさせ給へりしを、多かりし人の中より、の

びあがり見奉りて、指をさして物を申しゝかば、何事ならむと思ひ給へしを、後に承りしかば、『貴臣よ』と申しけるなり。さるは、いと若くおはしますほどなりかしな。いみじきあざれ言どもに侍れど、まことにこれは徳至りたる翁どもにて候ふ。などか人のゆるさせ給はざらむ。又つたなき下薦のさる事もありけるはと聞し召せ。

三五八

亭子院の河尻におはしましゝに、白女といふ遊びものめして、御覧じなどせさせ給ひて、「遙かに遠く候ふよし、歌に仕うまつれ」と仰せ言ありければ、詠みて奉りし、

はま千鳥とびゆく限りありければ雲たつ山をあはとこそ見れ

三五九

いといみじうめでさせ給ひて、物かづけさせ給ひき。「命だに心にかなふものならば」も、この白女が歌なり。又、鳥飼の院におはしましたるに、例の遊びども數多参りたる中に、大江の玉淵が女の聲よくかたちをかしげなれば、あはれがらせ給ひて、上に召上げて、「玉淵は、いと薦ありて、歌などいとよく詠みき。この『とりかひ』と云ふ題を、人々の詠むに、同じ心に仕うまつりたらば、まことの玉淵が子とは思召さむ」と仰せ給ふを、承りてすなはち、

ふかみどりかひある春にあふときは霞ならねど立ちのぼりけり

など、めでたがりてみかどよりはじめ奉りて、物かづけ給ふ程の事、南院の七郎君に、うしろむべき事など仰せられける程など、くはしうぞ語る。

三六〇

延喜の御時、古今撰ぜられしをり、貫之は更なり、忠岑や、躬恒などは、御書所にめされて候ひける程に、〔櫻の木に郭公の鳴くを聞しめして〕四月二日なりしかば、まだ忍び音の頃にて、いみじう興じおはします。貫之めしいでゝ歌仕うまつらしめ給へり。

こと夏はいかゞなきけむほとゝぎすこの宵ばかりあやしきぞなき

それをだにけやけき事に思ひ給へしに、同じ御時に、御遊びありし夜、御前の御階のもとに躬恒を召して、「月を弓張といふ意は、何の意ぞ。これがよしつかうまつれ」と仰せ言ありしかば、

三六一

てる月をゆみはりとしもいふことは山べをさしていればなりけり

と申したるを、いみじう感ざせ給ひて、大袿たまはりて、肩に打懸くるまゝに、

白雲のこのかたにしもおりゐるはあまつ風こそ吹きてきぬらし

いみじかりしものかな。さばかりの者を近うめしよせて、勅祿賜はすべき事ならねど、そしり申す人のなきも、君の重くおはしまし、又躬恒が和歌の道にゆるされたるとこそ、思ひ給へしか。かのあそびどもの歌よみ、感じ給へるは、さぞ侍る。院にならせ給ひ、都離れたる所なれば」といふこそ、あまりにおよすげたれ。この侍問ふ、「圓融院の紫野の子の日の日、曾禰好忠いかに侍りける事ぞ」

三六二

といへば、「繁樹それ〳〵いと希有に侍りし事なり。さばかりの事に上下をえらばせ、和歌を賞せさせ給はん事、げにくちをしき事に侍れど、隠ろひて優なる歌を詠み出さむだにいと無禮に侍るべき、殊に座にたゞつきにつきたりし、あさましく侍りし事ぞかし。實資小野ノ宮殿・朝光閑院ノ大將殿などぞかし、引立てよ、引立てよと掟てさせ給ひしは。躬恒が別禄たまはるに、たとしへなき歌よみなりかし。

三六三

歌いみじくとも、折節きりめを見て仕うまつるべきなり。けしうはあらぬ歌よみなれど、辛く劣りにし事ぞかし」といふ。

侍こまやかにうち笑ひて、「古のいみじき事どもの侍りけむは知らず、なにがし物覺えて不思議なりし事は、三條院の大嘗會の御禊の出車、彰子・妍子大宮・皇太后宮より奉らせ給へりしぞありしや。大宮の一の車の口の眉に、註香嚢かけられて、註空薫物たかれたりしかば、二條の大路の、つぶと煙満ちたりしさまこそめでたく、今にさばかりの見物またなし」などいへば、世繼「しか〳〵、いかばかり御心に入れていどみせさせ給へりしかは。それに女房の御心のおほけなさは、さばかりの事を簾おろして、渡り給ひにしはとよ。あさましかりし事ぞかしな。ものけたまはる口に乗るべしと思はれけるが、しりに押下され給へりけるとこそ承りしか。げに女房の辛き事にせらるなれども、主の思召さむ所も知らず。男はえしかあるまじくこそ侍れ。大方その宮には、心おぞましき人のおはするに

三六四

や。註貳字一品ノ宮の御裳着に、道長入道殿より、玉を貫き巌を立て、水を遣り、えもいはず調ぜさせ給へる裳・唐衣を、まづ奉らせ給ひて、「道長中にも取分きて思召さむ人に賜はせよ」と申させ給へりけるを、註さりともと思ひ給ひける女房の賜はらで、やがてその歎きに病づきて、七日といふにうせ給ひにけるを、などいとさまで覺え給ひけむ。罪深く、ましていかに物ねたみの心深くいましけむ」などいふに、あさましく、いかでかくよろづの事、御簾の内まで聞きたらむと恐ろし。

かやうなる嫗、翁などのふるごとするは、いとうるさく、聞かまうきやうにこそ覺ゆるに、これはたゞ昔に立返りあひたる心ちして、又々もいへかし、さしいらへごと、問はまほしき事多く、心もとなきに、講師おはしましにたりと、立騒ぎのゝしりし程に、かきさましてしかば、いと口惜しく、事果てなむに、人つけて、家は何處ぞと見せむと思ひしも、講のなからばかりが程に、その事とな く、とよみとて、かいのゝしり出で來て、ゐ込みたりつる人も、皆くづれ出づる程に紛れて、いづれともなく見紛らはしてし口惜しさこそ。何事よりもかの夢の聞かまほしさに、居所も尋ねさせむとし侍りしかども、ひとりひとりをだにえ見つけずなりにしよ。

三六五

三六六

まことと〳〵、御門の母后の御許に行幸せさせ給ひて、御輿寄する事は、深草の御時よりありける事とこそ。それがさきは、下りて乗らせ給ひけるを、註藤智子后の宮、「行幸の有様見奉らむ、たゞ寄せて

奉れ」と奏せさせ給ひければ、その度、さておはしましけるより、今は寄せて乘らせ給ふとぞ。

○

三六七〔附記〕三六八　中院源雅定公皇后宮の大夫殿書き繼がれたる夢なり。

この年ごろきけば、百日千日の講行はぬ家々なし。老いたるも若きも、後の世の勤をのみおぼし申すめるに、一日の講も行はず、たゞつくづくと、いたづらにおきふしてのみ侍る罪深さに、ある所の千日の講、卯の時になむ行ふと聞きて參りたりけるに、人々所もなく、車もかちの人もありけむ。やゝ待てど講師見えず。人々のいふを聞けば、今日の講は夕つ方ぞあらむなどいふに、歸らむも罪得がましく思ふに、百歳ばかりにやあらむと見ゆる翁のゐたる傍に、法師の同じ程に見ゆる、人の中を分けて來て、この翁に、「僧いとかしこく見奉りつけて、あながちに參りつるなり。そも〳〵御前は一年、世繼の、菩提講にて物語し給ひしに、あながちにゐ寄りて、あどうち給ひしと見奉るは老法師の僻目か」といへば、をとこ、「男さもや侍りけむ」といふ。「僧これはいで興ありて、その世繼には又や逢ひ給へりし」といへば、「後三條院男生れさせ給ひてなむ、あひて侍りし」といへば、「僧さて〳〵いかなる事か申されけむ。そのかみごろも、耳も及ばず承り思う給へし、その後さま〴〵興ある事も侍るを、聞かせ給ひけむ。まことに今の世の事とり添へて宣はせよ。あはれ幾歳にならせ給

三六九

ひ侍りぬらむ」といへば、「翁註二の舞の翁にてこそは侍らめ。さはあれど、聞かむと思召さば、すこぶる申し侍らむ。まづその年萬壽二年きのとの丑の年、今年つちのとの亥の年とや申す。八十三年にこそなりにて侍りけれ。いでや、何ばかり見聞きたる事のなさけも侍らず。かの世繼の申されし事も、耳に止まるやうにも侍らざりき」といへば、法師、「僧いで〳〵、さりとも八十三年の功德の林とは、今日の講を申すべきなゝめり。今も昔も、しかぞ侍りし。二の舞の翁、ものまねびの翁僧らが申さむことを、正敎になずらへて、誰も聞し召せ」といへば、翁、「翁詞聞しめしどころも侍るまじけれど、かく切に勸め給へば、今はの刻みに、をこの者に笑はれ奉るべきにこそ。

三七〇

見きゝ侍りしは、後一條院、長元九年四月十七日うせさせ給へる、天下を知ろしめす事二十一年。その程いらなく悲しき事多く侍りき。中宮は、やがて思召し歎きて、同じ年の九月六日うせさせ給ひにし。上東門院おぼしめし歎きしかど、これにも後れ奉らせ給ひて、一品の宮・前の齋院をこそは、かしづき奉らせ給ひしか。院のおほん送葬の夜ぞかし、常陸の國の百姓とかや、

三七一

かけまくもかしこき君が雲の上に煙かゝらむものとやは見し

五月ばかり、郭公を聞し召して、女院、

ひと言を君につげなむ郭公このさみだれはやみにまどふと

このおほむおもひに、源中納言顯基の君出家し給ひて後、女院に申し給へりし、

身をすてゝやどをいでにし身なれどもなほこひしきは昔なりけり

三七二　御返し、

三七三　ときのまもこひしき事のなぐさまば世はふたゝびもそむかれなまし

その時は、かやうなる事多く聞え侍りしかど、數々申すべきならず。

後朱雀院位につかせ給うて、さはいへど、花やかにめでたく世にもてなされて、暫しこそあれ、一の宮の方にゐさせ給ふ一品宮、后に立たせ給ふ。後三條院生れさせ給ひにしかば、さればこそ、昔の夢は空しかりけりや。なからむ末傳へさせ給ふべき君におはしますとぞ、世繼申されし。今后、弘徽殿におはしまし、東宮、梅壺におはしまして、先帝の一品の宮、春宮に參らせ給ひて、藤壺におはしまして、女院入らせ給ひて、ひとつにおほし奉らせ給へる宮達、いづれともおぼつかなからず見奉らせ給ふめでたさに、故院のおはしまさぬ嘆き、盡きせず思召したりけり。

三七四　關白殿にやしなひ奉らせたまひし故式部卿の宮の姫宮、內に參らせ給ひて、弘徽殿におはしますべしとて、かねて后宮いでさせ給ひしこそ、いかに安からず思召すらむと、世の人なやみ申しゝか。明日まかでさせ給はむとて、上にのぼらせ給ひて、帝いかゞ申させ給ひけむ、宮、

今はたゞ雲ゐの月をながめつゝめぐりあふべきほどもしられず

この宮に女宮二所おはします。齋宮、齋院に居させ給うて、いとつれ〴〵に宮たち戀しく、世もすさまじく思召すに、五月五日に、內より、

もろともにかけしあやめのねをたえて更にこひぢにまどふ頃かな

三七五　御返し、

かたゝ〴〵にひきわかれつゝあやめ草あらぬねをやはかけむと思ひし

殿の御もてなし、かたはらいたく煩はしくて、久しく入らせ給はず。されど、この宮おはしますとそは頼もしき事なれど、今の宮に男みこ生み奉り給ひてば、疑ひなき儲の君と思召したる、ことわりなり。よき女房多く、出羽ノ少將・小辨・小侍從などいひて、手書き・歌詠みなど、花やかにていみじうて候はせ給ふ。

教科定本

大鏡

終

昭和十年十二月五日初版印刷
昭和十年十二月十日初版發行

教科定本 大鏡（挿註大鏡通釋本文）

〔定價金壹圓〕

著者 橋純一

發行者 古澤俊
東京市神田區金澤町二三番地

印刷者 吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地

不許複製

著者檢印

發行所 東京市神田區金澤町二三番地 瑞穗書院
電話下谷八三三六番
振替東京四四九九〇番

大賣捌 東京・東京堂・上田屋書店・北隆館・大阪・寶文館

東京・株式會社廣文社印刷所・早稻田

文學士 橋純一著

挿註 大鏡通釋

教科定本 大鏡（右通釋對照用本文）

四六判（通頁）四六〇頁 定價 貳圓 送料 拾錢

四六判（通頁）二六〇頁 定價 壹圓 送料 六錢

挿註 大鏡通釋 は大鏡の本文を持つてゐる人の爲に、本文を省き、而も如何なる本文の如何なる部分とも、直に照合し得るやう工夫した最も經濟的で最も正確詳密な詳解的全釋本である。

本書の特色

一、通釋文の文法的正確。殊に敬讓語法、時法の表現に對する周到な注意。

二、語句註釋を通釋文中に挿入し、讀み下しのまゝに直ちにピンと來る新樣式。

三、和歌に對する解釋批評の叮嚀親切。

四、正確なる考證に根據せる穩健妥當の新說。

五、著者創始の工夫に成る「大鏡人物年表」の添附

六、多數の繪畫系圖の適切なる箇所への挿入。

教科定本 大鏡 は、右の通釋の對照用本文として編された本文である。大鏡は諸本により語句の異同が多いが、本書は通釋著述の際精しく考定した所により最も妥當な本文を成し、本文だけ獨立させても、學習用本文としては最良の定本といひ得る。毎頁欄外に「通釋」の相當頁を記入し、又毎頁多數の語句につき「通釋」との對照符號を附してある。「通釋」は他の任意の本文に對しても十分の適應性を有するが、この對照用本文と併用せらるれば、一層愉快に、完全な理解を得られることと思ふ。而してその理解は、本文と註釋との交錯した從來の樣式によるよりも、遙に立體的なものであることを驗せられるであらう。尙本文の卷頭附錄として、從來に類の無い詳密な語句索引（本文と通釋との對照頁及び行を示す）を附してあり、古典解釋上に於ける其の利用價値は甚大である。

要するに「通釋」と、この「本文」と合して、こゝに大鏡の眞の味讀が可能になつたと言ひ得る。

東京市神田區金澤町二十三 瑞穗書院 電話下谷(83)八三三六番 振替東京四四九九〇番

終